

地域再生計画

1. 地域再生計画の申請主体の名称

北海道沙流郡平取町

2. 地域再生計画の名称

サケ・クマ・フクロウと共生する河川・森林環境再生プロジェクト

<通称> 「シシリムカ3K共生プロジェクト」第1ステージ

* シシリムカは沙流川(一級河川)のアイヌ語古名であり、3Kはアイヌ語 kamuy-chep = サケ、kimun-kamuy = ヒグマ、kotan-kor-kamuy = エゾシマフクロウを表わし、あわせてこのプロジェクト実現のために「3K労働」を厭わないという意思表示をこめたものでもあります。

3. 地域再生の取り組みを進めようとする期間

認定のあった日から4年間

4. 地域再生計画の意義及び目標

北海道日高支庁管内の沙流川中流に位置する当町は、国が策定した21世紀の国土グランドデザイン(資料1=13P)が示す、自然とのかかわりの中で育まれてきたアイヌ文化の振興等の推進と鶴川・沙流川等の流域を中心とする新しい文化の創造とを地域づくりの柱として「まちづくり」を進め、町立の二風谷アイヌ文化博物館(資料2=14P)が中心となり文化産業による活性化を図ろうと、「アイヌ文化の里づくりの推進」「アイヌ文化振興クラスター形成」「イオル構想の推進」(平取町アイヌ文化振興施策体系の概念図~資料3=17P)等に取り組み一定の評価を得て地域に定着してきています。

自然とのかかわりの中で育まれたアイヌ文化の振興等を推進することを始め、歴史的に形成されてきた特色ある伝統文化の継承、発展や、天塩川、鶴川・沙流川等の流域を中心とする新しい文化の創造等を通じ、個性豊かな地域文化の創造、発信を図る。

しかし、生活を支え文化を育んできた流域環境は年々悪化し、昨年の台風10号が引き起こした森林等の崩壊は、大量の流出土砂と流木等の発生を招き流域環境の悪化が急速に進行し、住民の生活基盤はもとより文化を育み、豊かな自然の象徴とされるサケ・クマ・フクロウが

生息する河川・森林等の自然空間にも大きな変化をきたすなど生態系への影響も危惧されています。

当町は、「自然と人間との共生」を地域づくりの理念とする「沙流川流域の伝統的生活空間（イウォロ）整備構想～参考資料1」を策定しております。アイヌ文化の保護、伝承、振興の根幹をなし、基盤でもある自然環境が悪化し深刻な状況にあることに鑑み、その再生にあたってはこの理念のもとに幅広い国民の参画を募り、積み上げられてきた地域に伝わる知恵や特色を活かし、資源としての活用方策や環境負荷が小さく自然にやさしい新たな発想と多様な技法についての協議を進め、連関する民間の活力を活かした自然再生方策を検討するとともに、「自然と人間との共生」を企図できる地域循環型社会経済システムの構築をめざします。

5.地域再生計画の実施が地域に及ぼす経済的社会的効果

平取町には、古くからアイヌの人々が集住し、自然との共生を大切に生活空間を築き、特色のある文化を形成してきました。

しかし、経済性や生産性を優先する国家的政策等の進行により、アイヌ民族の生活基盤であり文化伝承等の基盤でもあった、豊かな自然環境が無秩序に開発され悪化し、ある意味で破壊されてきました。

経済の発展は、人々の生活水準の向上をもたらしましたが、一方で価値観、生活様式の多様化を推し進め、生活、環境、文化、産業の各分野に様々な問題を引き起こしています。経済成長と都市化は、都市住民の心のゆとりを奪い、人々はそのよりどころを豊かな自然環境の中にもとめようとしています。

地球規模で環境問題が取り上げられている現在、アイヌ文化の精神を基調に「サケ・クマ・フクロウと共生する河川・森林環境再生プロジェクト」がめざそうとする地域再生計画（イメージ図～資料4＝18P）は、他に先駆けた、波及効果の高い貴重な地域政策となります。

二風谷アイヌ文化博物館入館状況（表 1）

	入館者数（人）	入館料（円）
平成13年度	32,097	9,636,950円
平成14年度	34,243	10,301,500円
平成15年度	31,267	9,534,850円

二風谷アイヌ文化博物館では、明確にエコツアーと銘打った取り組

みは実施しておりませんが、アイヌ文化の普及・啓発活動の中で入館者の約3分の1の方が類似の事業に参加しており、今後、国の支援を受けつつ他団体とも協調して、具体的に国立公園等でエコツーリズム（参考資料2）を推進すれば、観光客等の誘致効果は、およそ8,000人と想定され、更に、周辺町村への波及効果も期待でき、その効果はさらに膨らみ、経済的効果や雇用の創出につながります。

又、経済成長の過程で開発され、ある意味で破壊された自然環境の再生をグローバルな視点からプログラムの一つとして取り上げることで、その重要性についての理解が得られるものと期待できます。

流域に顕在化する流木や間伐材などの未利用の資源については、積み上げられてきた知恵や特色を活かす自然性資材としての試行により、又、木質系のバイオマスエネルギー等として活用することにより、新たな産消協働型産業が創出されるものと期待されます。

また、バイオマス資源を日本有数の産地として知られる当町の施設野菜（トマト＝商品名ニシパの恋人）生産のハウス暖房用燃料として、また土壌の改良剤、堆肥として活用するための研究を進め、波及効果の高い循環型社会経済システムの構築を目指します。

<観光客等の誘致効果： 8,000人>

二風谷アイヌ文化博物館入館者 6,000人

（エコツーリズムの推進等により入館者が20%程度増すると想定）

各種体験学習プログラム参加者 2,000人

（中学・高校を中心に10校、各校200人程度増すると想定）

6. 講じようとする支援措置の番号及び名称

212015 = 地域再生支援チームの設置

213004 = エコツーリズムに対する支援

230003 = バイオマスタウン（仮称）の実現に向けた取り組み

7. 構造改革特区の規制の特例措置により実施する取組その他の関連する事業

無し

8. その他の地域再生計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

無し

別 紙

1.支援措置の番号及び名称

212015 「地域再生支援チーム」の設置

2.当該支援措置を受けようとする者

北海道沙流郡平取町

3.当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

当町では、『サケ・クマ・フクロウと共生する河川・森林環境再生プロジェクト』として、エコツーリズムの推進、バイオマスの活用等を中心に地域再生に向けた検討を進めていますが、検討過程での課題解決や、計画実施後のフォローアップ等の各段階において、必要に応じ、地域再生支援チームからのワンストップでの助言や関係機関との調整、アドバイザー派遣仲介、情報提供等の支援を得ながら、より効果的な事業の展開を図っていきたいと考えています。

別 紙

1. 支援措置の番号及び名称

213004 エコツーリズムに対する支援

2. 当該支援措置を受けようとする者

北海道沙流郡平取町

3. 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

1) エコツーリズム推進の現状と課題

平取町におけるエコツーリズム推進の現状につきましては、はっきりとその名称を冠した施策こそ動いておりませんが、町立の二風谷アイヌ文化博物館を中心としたアイヌ文化普及・啓発の活動の中において、実態的には類似の事業に多様な形で取り組み一定の成果を上げてきております。

また、今後の展望についても、重点施策の一つとしておりますアイヌ文化振興を軸とした地域づくりに関連して、エコツーリズムの理念をふまえた施策・事業展開を予定しています。

しかし、質・量の両面で飛躍的な進展を実現するためには、とりわけ次のような課題のクリアが求められていると認識しています。

素材や資源は豊富で、個別プログラムの集積はいくらか進んできたとはいえ、これらを包括的にリンクし、市場性の高い「商品」として開発しえていません。

マネジメントとマーケティングのノウハウが不足しており、その克服のために専門家からの総合的かつ集中的な指導・支援を得る必要があります。

活動の基盤・母体となる組織を系統的に育成し、共通の理念・方向性のもとにネットワーク化を図り、強めることが必要です。

2) 取り組み実績

明確にエコツアーと銘打った取り組みではありませんが、地域内で行われている類似の事例をあげます。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館を中心に民族文化の体験学習をプログラム化してきました。主に中学生・高校生が研修旅行の際にこれらのメニューの中から組み合わせたツアーを受け入れています。

近在の野山でアイヌの植物利用について学び、実際に採取したり、加工したりする実習と体験。

民族舞踊（国の重要無形民俗文化財の指定を受けたアイヌ古式舞

踊)の鑑賞と体験を通じてアイヌの伝統的精神文化にふれる試み。
アイヌ文様入りの木彫りや刺繍のコースターづくり実習。

伝統的な家屋(チセ)の中で、古老から昔話や民話、口承文芸を
生(ライブ)で聴く集い。

伝承者と共にアイヌ語地名や伝説を訪ね歩くバス遠足。

史跡・遺跡を訪れ、説明を受けるだけでなく発掘調査も体験。

専門家と共に沙流川水系の生態系の推移を体感するフィールドワ
ーク。

クマ、シカの肉をはじめ伝統的な食材と調理法を活用した民族料
理を作り、味わってみる実習と体験。

博物館見学に来訪する修学旅行生を中心に、年間で約1万人の人が
こうしたアイヌ文化に係わる実習体験プログラムに参加しています。

この他に、各種団体・行政関係機関による日高山脈襟裳国定公園や
日本百名山の一つ幌尻岳関連のガイドツアー、自然保護団体による天
然記念物沙流川原生林の樹海・美林探訪ツアー、NPOによる植樹・
育林ツアーなど多彩に行われており、地域固有の特色ある自然・風土・
歴史・文化にふれながら学び、憩い、心身の再活性化を促すエコツー
リズムのフィールドとしてはきわめて大きなポテンシャルを有してお
り、まだ十分にオーガナイズされていないとはいえ、エコツアーの本
格的な展開に向けた多種多様な萌芽的試みが蓄積されているというこ
とができます。

3) 想定されるツアープログラムの内容及び工程

プログラムの内容

事業展開の総体にわたって、軸となる次の2つのコンセプトのもと
にプログラムを展開するものとします。

【その1】

カントオロワ ヤクサクノ アランケブ シネブカ イサム

= 矢から 役目なしに 降ろされたものは 一つもない」

【その2】

人間(aynu)がアズマシク暮らせる地域社会

< for comfortabile eco-community >

『環境白書』(1995年)にも記されたように、環境問題の解決
策を検討する上で世界の先住民族、就中日本においてはアイヌの伝統
的な精神文化と知恵に学ぶべきだとする気運が広がり定着していま
す。

しかし、その伝統文化の今日的継承と現代的活用のあり方をめぐっ

ては、必ずしも事実即ち正確な認識が形成され普及しているわけではなく、ステレオタイプなイメージが再生産されていくことさえ危惧される状況があります。

「天から役目なしに降ろされたものは一つもない」という世界観・自然観を基調にしながら、現代の地域社会に暮らすアイヌの人たちとの多様多彩な接点を作り出す細やかな配慮を盛り込んだ実習や体験を盛り込んだプログラムが広く実施されていくなれば、相互理解に寄与するだけでなく、互恵的な交流として深化し、スローガンのものだけではない環境問題への新しく有意義な対応策を生み出すことにもつながる可能性を秘めています。

このような企図もふくめて、当地で展開するエコツーリズムは、既存の「希少で美しい」自然、できあがった「文化性豊かな」マチ・ムラを訪ね探るというのではなく、自然、地域、あるいは共同体を懸命に「再生」しようとする取り組み人びとの姿に触れ、その創造のプロセスを体験、共有し、自身も加わるエコ・コミュニティ（単に同じ地域に住むということだけではない）を共に創り出そうとする志向性をも含意したものです。

以上のコンセプトのもとに、国のエコツアーに関する情報支援を活用しつつ各種の試行段階のプログラムを、ブラッシュアップし、新たに編み出していく取り組みを集中的・系統的に行い、エコツーリズムの本格的な展開に向けて確かな基盤を確立していくようにします。

事業実施工程

【第1ステップ】

推進体制立ち上げと調査を重点に以下の課題に着手

- ・ルール（基本理念・計画等）の策定と共有
- ・資源調査
- ・人材と組織の育成
- ・プログラム（モデルエコツアー商品）の開発
- ・プログラムの販売体制・ツール整備と営業活動
- ・「イオル・エコツーリズム推進協議会」（仮称）を設立
- ・シンポジウムの開催

【第2ステップ】

ルール策定と共有化を重点的に実施

【第3ステップ】

推進体制強化とプログラム開発・販売面での多様な試行を重点的に実施

別 紙

1. 支援措置の番号及び名称

230003 バイオマスタウン（仮称）の実現に向けた取り組み

2. 当該支援措置を受けようとする者

北海道沙流郡平取町

3. 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

1) 木質バイオマスの動向

循環型社会経済システム推進の目標は、化石燃料などの天然資源の使用を抑制する事で、木材はこれらの資源と違い、森林 伐採 植林 成長（CO2の吸収） 森林と一定の期間を経て再生産が可能な循環型資源で、「バイオマス・ニッポン総合戦略」の中でも期待されている資源の一つです。

木材のバイオマス資源の活用の方向としては、建材、薪などの燃料材、炭化原料、家畜敷料（堆肥化）、キノコ培地、ボード原料、バイオトイレ、建設・土木園芸・ガーデニング・緑化用資材などの多様な活用が考えられます。

近年は、地球温暖化防止の視点から、再度、木質系燃料用ペレットとしての利用についても注目を集めるようになってきております。

2) 過去の反省にたった、創造性豊かな木質資源の活用

木材価格の長期低迷により衰退傾向にある森林・林業・木材産業において、かつて、国の強力なバックアップのもと地域エネルギー開発モデル事業の一環として木質系ペレットの振興が図られましたが、出口対策（エネルギーや製品の安定的な需要確保）がなされずに大型の機械導入、プラント建設などと初期投資がかさみ、設備償却費・運転コストの増大から採算にあわずに、苦しみながら事業から撤退した経緯があります。

しかし、近年、循環型社会へのシフトに向けての法整備が進展し、バイオマスエネルギーが再度注目されていることから、木質バイオマスのローカル性に着目し、小型プラントで低コストにより稼働する方を提案し、優位性・品質・価格などの差別化を図るメーカーもあり、地域の実情に応じた取り組みが不可欠なものと考えます。又、生産から消費までの循環システムを構築するうえで様々な課題もあり、十分

な検討が必要となります。

3) 産消協働による木質バイオマス活用事業の事例

【沙流川流域における資源循環型産業形成業務】

事業主体

(社)北海道ウタリ協会平取支部

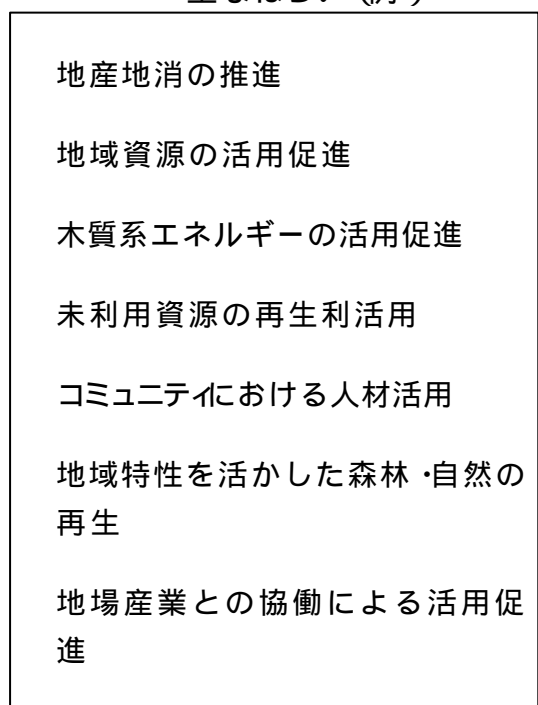
事業目的

昨年8月の台風10号によって、大量の流木が発生し、顕在化していることから、沙流川流域でのアイヌ文化と連携した資源循環型産業の育成について関心が高まり、その可能性と回収流木の有効活用についての調査と産消協働の検討を行いました。

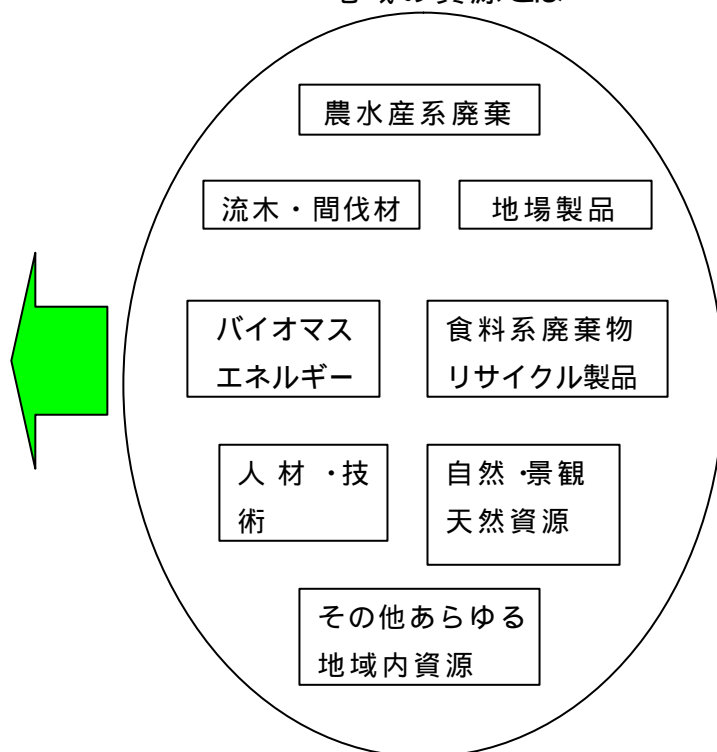
事業成果

地域の異業種間の連携により、流木などの未利用材を活用した地域資源循環型産業形成の可能性が高いこと、及び、その必要性について再認識することができました。

主なねらい(例)



地域の資源とは



生産から消費までの循環システム
新しい需給関係

循環型の社会

バイオマスタウン

4) 地域の特色を活かした地域循環型社会の形成にむけて

平取町の施設野菜（トマト＝商品名ニシパの恋人）の生産は、日本有数の産地として知られており、バイオマス資源をハウスの暖房の燃料として活用することや土壌の改良剤、堆肥として活用することについても今後研究を進め、産消協働による地域資源循環型産業形成を目指します。又、自然との共生を精神とするアイヌの伝統的な技術と知恵を活かした自然再生を試行し、荒廃している森林環境を復元し、新たな産業としての可能性についての調査研究も進めます。

5) 今後の取り組み

バイオマス情報ヘッドクォーターを介して適切な情報を入手し、地域循環型社会の実現をめざします。

第1ステップとしては、推進体制としての協議会等を立ち上げ資源調査及び需要調査、山地の荒廃調査を重点に実施するなど課題を整理共有し、事業化に向けた人材及び組織の育成を考えます。

第2ステップとしては、資源等各調査結果を踏まえた事業化の可能性についての調査を実施し、木質系バイオマスの実用化に向けた取り組みと、新たな産業基盤形成についての検討を開始します。

第3ステップでは、アクションプログラムを策定し、地域の資源循環型産業形成と新たな視点にたった森林などの自然再生の取り組みをめざします。